

ぼくを支えてくれた友達へ

「ひまだから、ついて行ってもいい？」

と、昼休みに君たちが声をかけてくれた。ぼくが、ピアノをひき始めると、いっしょに歌ってくれた。ぼくは、わくわくしてきた。みんなの声と合わせると、気持ちがいい。おに特訓だと思っていたばんそうの練習が、楽しくなってきた。

ぼくが、市の音楽会のばんそう者に立こうほしたのは、姉がひく合唱コンタールの動画を見て、ぼくも同じ場所ですいてみたいと思ったからだ。そんな軽い気持ちで引き受けたんだ。しかし、それはおに特訓の姉妹リだった。

登校前にピアノ。登校後にピアノ。昼休みにピアノ。下校後にピアノ。ぼくを支えてくれたのは、家族とピアノの先生と音楽の先生、そして君たちだった。

学年練習では、と途中で止まってしまった。あせって、どこをひいているのか分からなくなった。練習しなくちゃいけないのは、百もしょうち。実は、70%の気持ちで迷っていた。でも、君たちが練習に付き合ってくれたおかげで、おに特訓を乗りこえられた。

本番では、みんなの歌声が聞こえると、ドキドキがなくなった。演奏後に君たちが「すごいね」「上手だったね」と言話しかけてくれて、うれしかった。ぼくがほとんどミスなくひけたのは、練習に付き合ってくれた君たちのおかげだ。ありがとう。今度はぼくが支えてあげるね。

